

《海外事情》

## ナショナル・トラスト運動

— ハニコト・エステートのクラウトシャム農場を例にして —

### 四元忠博

キーワード：工業化と都市化，入会地（コモンズ）保存協会，ナショナル・トラスト，ナショナル・トラスト法，譲渡不能，農業危機，地域の再生，パートナーシップ，持続可能な農業，粗放農業，農業環境政策

#### 第1章 ナショナル・トラストの成立と戦略的目標

人と人が寄り添い、語り合い、助け合う時代が確かにあった。また同時に自然の中であって動物や植物に囲まれながら自らが癒されていた時代が確かにあった。それらの時代が無くなったのは、いつの頃からなのだろうか。

人間社会が資本主義経済のもとに最大利潤を求めて、ひたすら工業化を推し進めてきたことに大きな原因がある。もうひとつ重大な歴史的事実を指摘しておかねばならない。資本主義の成立以降、とくにイギリスにおいて18世紀後半産業革命が生じて以降、工業化と都市化が進み外国貿易が加速化された。それに工業化の先行条件として、国民の大部分をなす農民からの土地収奪、すなわち労働力の商品化が必要であった。イギリス農村の囲い込み（エンクロージャ）は歴史上古くから行われてきたが、とくに産業革命の勃発とともに行われた第2次囲い込み運動は、議会の立法的手続きを経て、きわめて大規模に行われたことはあまりにも有名だ。ここに産業革命以降、農村から都市へ人口が移動し、都市化が急速に進み、それと同時に国民の大多数が土地から切り離され、農村におけるコミュニティが失われていった。

大地＝自然は人間社会の生活の場であるとともに、生活を営み続けるための資源を生み出す場だ。

ところが産業革命後、とくに1830年代以降、鉄道時代を経て重工業段階に入ると、いよいよ自然破壊が進む。たとえばいずれの工業製品であれ、それらに用いられた原材料およびエネルギーは、再び資源として戻ってくることはない。

かくして1865年には自然破壊を阻止するために入会地（コモンズ）保存協会が活動を開始するが、この団体は単なる人の集まりであったために、土地を獲得することができなかった。それ故に会社法のもとに土地を獲得するための法人たるナショナル・トラストが設立されたのが1895年であった<sup>①</sup>。

なお次のことだけは記しておきたい。トラストが創立された1895年と言えば、産業革命後一世紀を経ており、すでに鉄道時代を経て重工業段階に達していた。資本主義経済下、工業化と都市化は進む。その過程で田園地帯が都市化に飲み込まれていくのに気づいたのは、トラストの創業者3名だけではなかったはずだが、このような人々がナショナル・トラストの下に結集していったのである。ナショナル・トラストは純粋な民間団体として、広大な自然豊かな大地と、大地と一体化した歴史的建造物を、将来の世代の人々のために守り、育てることを目的とするために創設された。ここで織りなされる人類の歴史こそ、我々人間社会の将来への指針を示してくれるものだ。それではなぜナショナル・トラストは純粋な民間団体として創立されなければならなかったのか。この歴

史的事実を正しく理解し、把握しておくために、ここでは「ナショナル」と「トラスト」の持つ意味を明らかにしておこう。

「ナショナル (national)」について。いつだったかわが国のある公式の集会で、ある野党の国会議員が「ナショナル」であるから、政府と協力すべきだと公言した。これは誤りだ。「ナショナル」は国家ではなく、'for nation' (国民のために) を指すのであって、決して政府や行政を指すのではない。政府や行政が必ずしも大地＝自然を守ることができないことは、今ではもう私たち日本人でも十分に知っている。それ故にこそ、一国の国土を守るためには、当然政府・行政が自らの国土を守る責務を有するけれども、それだけでは不十分だ。ここに自らの国土を守るためには政府・行政と民間あるいは国民が相互に独立して責任を負いながらパートナーシップを組んで我々の国土を守っていかねばならないことは明らかである。だからこそイギリスにおいて早くも1895年、自然を守るための民間団体がナショナル・トラストとして成立したのである。

「トラスト (信託)」の意味はどうか。この言葉も理解するのに私たち日本人には難しいのだが、とりあえず次の表現を用いたい。「草創時よりトラストが国民から信託された (トラスト) 資産を忠実に、かつ命がけて守り続け、その質を高めるために努力してきたからこそ、今日の強大なナショナル・トラストがある」。だからこそナショナル・トラストと会員、そして支持者の間に強い信頼関係が生まれ、現在ではナショナル・トラストと会員、支持者ひいては国民と資産 (= 大地) との間に三位一体の強い関係が築かれているのだ。

創業者3名 (ロバート・ハンター：弁護士、オクタヴィア・ヒル：社会改良家、ハードウィック・ローンズリィ：牧師) のもとにナショナル・トラストが法人団体として会社法のもとに正式に登録されたのは1895年だ。創立を機にトラストは着実に発展した。1906年になるとトラストの資産は24件となり、土地面積は約680haとなった。この実績を踏まえ、トラストを法のもとに再構成し、その土地管理能力に、より大きな法的権限を

与えなければならない。このことは1895年のトラストの基本定款にすでに掲げられていた。幸いに1907年に最初のナショナル・トラスト法が議会通过した。この法律によってトラストはその所有資産 (土地と建物) は「譲渡不能である (inalienable)」と宣言する権限を付与された。いよいよトラストはこれを契機に飛躍へ向けて進むことになる<sup>(2)</sup>。

ナショナル・トラスト運動は成立以来着実に成長し、かつ年を重ねるごとに貴重な体験を積み重ねてきた。これこそナショナル・トラストがナショナルであり、かつトラストである所以だが、そうである限りトラストは今後も成長していくはずだ。だからと言って順風満帆に成長を遂げてきたわけではない。このことをしっかりと踏まえた上で、2010年2月28日現在のトラストの動きと規模を見ると次のとおりだ。370万人の会員 (全人口の6.5%強)、6.1万人のボランティア、約5,000人の職員を擁し、約25.5万ha (全国土の1.5%強)、1,141kmの海岸線 (全海岸線の約23%)、350以上のカントリー・ハウスや古代の遺跡などを所有し、管理・運営している。入場有料の訪問者は1,720万人を数え、その他入場無料のトラストのカントリーサイドや海岸線を訪ねている人々は5,000万人を超えている。このようにトラストの成長には多くの面で目を見張るものがある。実際に私自身、1985年以来ほぼ毎年ナショナル・トラストを歩いてきている中で、そのことを実感している (写真1)。



写真1 ナショナル・トラスト本部 (スウィンドン)

トラストが人と大地をつなぐためにこそ創られたのだし、またオクタヴィア・ヒルが「貧しい人々のためのオープン・スペース」に思いを巡らしたのもこのような大地であった。大地＝自然こそ、私たちの心を癒してくれるオアシスであり、またストレスに満ちた現実世界から私たちを救い出してくれる。上記のとおり、トラストは今日の社会経済のおよび自然環境危機に取り組むだけの力を付けている。今日、我が国を含めて世界各国が、社会的矛盾や不況にあえいでいるが、とくに地域または農村社会の衰退には目に余るものがある。資本主義経済下、工業化と都市化が進む中、農業部門の衰退は必然的だと言わざるをえないが、とにかくこの歴史的必然性を明らかにすることは、私たちに残された重要な研究課題だ<sup>(3)</sup>。イギリスにおいて、いわゆる農業危機が現実化したのは、産業革命後自由主義経済が実行に移されて（1846年、穀物法の廃止）一世代を経た1873年になってからだ。それ以来農業危機は基本的に言って、今日まで解決されていない。

それ故に21世紀に入ってからのトラストの戦略的な目標は、ナショナル・トラストがイギリスで「地域の再生」のためのリーダーシップを発揮することだ。それとともに自然保護教育と生涯教育をより一層拡充し、自然景観と歴史のおよび文化的遺産への人々の理解を深めることだ。2008年からはトラストの目標は、上記の目標の達成を踏まえて、以下のような表現となっている。

①トラストの支持者を増やし、その人々をナショナル・トラスト運動に引き込む。②自然（＝資源）の質の維持と向上。③人へ投資する。ナショナル・トラスト運動は公共的・公益的な活動だ。だからトラストの自然保護活動の真の価値は、美を追求し、生活の質を向上させ、地域の特殊性を保ち、トラストの大地＝自然へ人々を誘い、そしてそれらの人々がトラストの仲間になってくれることだ。トラストのボランティアやスタッフがこれらの価値を深く理解し、それらを他の人々へ伝えていくことはたいへん大事なことだ。そのために必要な経費を惜しむべきではない。④財政基盤を確立しなければならない。これはまたトラストが政府・

行政から独立するための物質的基盤であるとともに、トラストの将来の活動を担保するための絶対的条件だ。いよいよトラストはイギリスで国民運動を展開するとともに、イギリス自体を変えていく段階に入っていく。

ナショナル・トラストの成立以来、115年が経過した。イギリスにおけるようなナショナル・トラスト運動の成果は、ヨーロッパはもとより世界を通じてその例を見ることはできない。今こそトラストが世界のナショナル・トラスト運動を率いていくべき時期に達していると考えべきだ<sup>(4)</sup>。それはとにかくトラストのフル・ネームはThe National Trust for Places of Historic Interest or Natural Beauty（歴史的名勝地および自然的景勝地のためのナショナル・トラスト）だ。3人の創業者たちが、イギリスの国土を守るために政府・行政から完全に独立した自然保護のための民間団体を打ち立てることができたのは大きな業績だ。ここに「ナショナル・トラストは、その発展に平等に寄与した3人の創業者のビジョンとエネルギーがなかったとすれば、考えられないのだということは明白である」<sup>(5)</sup>。

トラストの今日までの簡略な業績については上記のとおりだ。ここに一国の国土を守るためには、行政と民間の間にそれぞれの異なった役割があるのだということもすでに明らかにはずだ。例えばイギリスでは今日、後述のとおりトラストと政府・行政が相互に独立して、相互に責任を負いながらパートナーシップを組みつつ、国土を守るために協力している。我が国ではどうか。パートナーシップという言葉もめったに聞かれない。その上に我々民間人が我々の国土を守るために必死に努力しているにもかかわらず、我々の政府・行政はパートナーシップをもって我々と協力しているとはとても思われぬ。

「地球の危機」が言われて久しい。その象徴とも言うべき「気候変動（climate change）」にたいして、私たちの政府が国際的に、また国民に対して何か積極的な役割を果たしていると言えるだろうか。

政府・行政が自らの国土を守るべきは当然のこ

とだ。そのためにこそ公権力を持つ。民間団体であるナショナル・トラストに公権力はないし、また課税権もない。頼るべきは国民のトラストへの信頼感のみである。

イギリスでは、トラストの持つ所有面積は約25.5万ha（全国土の1.5%強）で、その80%弱は田園地帯にある。そのほぼ80%が農用地であり、ここで2,000名の借地農が彼らの農業労働者と共にトラストの借地契約に基づいて農業に従事している。トラストの大地はトラストのフル・ネームにあるように、いずれも自然美に富み、かつ歴史的に由緒ある土地である。

トラストの戦略的な目標は「地域の再生」だ。2001年は口蹄疫がイギリス全土を襲った年だが、この年のトラストの年次報告書には「トラストはこの1年間、ずっとトラストの借地農と一緒に働いてきた。…カントリーサイドを将来いかに守り育てていくかが、私たちの第一の課題である」と書かれている。農業部門がいわゆるグリーン・ツーリズム、そしてもっと広い経済部門と深いつながりを持っていることは、もはや説明する必要はあるまい。

トラストは土地所有者として、そして農村のビジネスにかかわるものとして、地域社会およびもっと広範な人々が直面している多くの課題にたいして、新たな解決を見出すための指導的立場に立っている。そしてこの場合、トラストが明らかに有利な立場にある証拠は、他の人々が単に言葉で理論化する命題を、自らの場で実行しうることだ。たとえば、いわゆる持続可能な農業（sustainable agriculture）がそれだ。

それではトラストが持続可能な農業を開始したのはいつか。コッツウォルズのシャーボン村の農場で実験農場が始められたのは1993年からだから決して古い話ではない。トラストが成立以来、首尾一貫した運動理念のもとに重い年輪を重ねながら到達したのが持続可能な農業であり、持続可能なオープン・カントリーサイドだ。

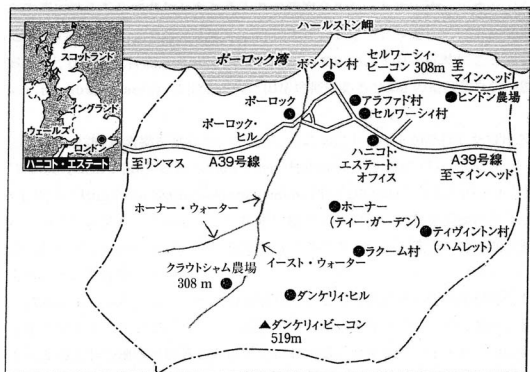
それではトラストのオープン・カントリーサイドを紹介したいのだが、どこにすべきか。前記のシャーボン村のシャーボン農場にしたいが、これ

は拙著および拙稿<sup>6)</sup>に譲ることにして、イングランド西南部にあるサマセット州のハニコト・エステートを訪ねることにしよう。現在ここは5,050.2haの広大な面積を占め、5つの村と14名の借地農を持つトラストの典型的なオープン・カントリーサイドの一つだ。ここにクラウトシャム農場（Cloutsham Farm）という山岳地帯で92haの畜産業を営む農場がある。この農場は2005年からトラストとの間に有機農業を営むための契約に入り、現在に至っている。ここをハニコト・エステートの一面を占める農場と位置づけつつ、この農業活動が地域の再生にとって、ひいては環境保護およびツーリズムを含む健全な国民経済を実現するために、いかなる意味と意義を有するのかを考えてみよう。

## 第2章 ハニコト・エステートを歩く

私がハニコト・エステートを初めて訪ねたのは1994年8月9日だ。あれからここを何度訪ね歩いたことだろうか。マインヘッドからA39号線をポーロックへ向けて歩いていくと、ヒンドン農場へ向かう道に出会う。ここからハニコト・エステートが始まる。この車一台しか通れないほどの道を進んでいくとヒンドン農場に行き着く。実はこの農場は先に述べたシャーボン農場に次ぐ2番目の有機農法のための実験農場だ<sup>7)</sup>。この農場の規模は約200haで、大部分が肉牛、羊、豚、そして鶏などの家禽類が飼育され、その他に耕地も

ハニコト・エステート





ある。2000年にトラストと有機農法を行う契約を交わし、現在に至っている。だからすべての土地が有機農場だ。その他にB&Bと自炊（self-catering）のためのコテージもある。ある時、この農場の借地農であるロジャー・ウェバー氏とのインタビューで、「この農場内ならば、リンゴを土の上に落としたって構わない。土を拭きさえすれば食べられる」と語ってくれた。私も似たようなことを思い出す。私が小学生から中学生の頃にかけて、粗放農業から農薬や化学肥料を使う集約農業へと移行しつつあった頃から、このような習慣がなくなったように思われる。例えばひもじさのあまり畑からさつまいもを直接に掘り出して食べたことも懐かしい思い出だ。

さて、ウェバー氏の言葉をかみしめながら、ヒンドン農場の歩道を登っていくと、ブリストル海峡を見下ろすことのできる海拔308mのところにあるセルワーシ・ビーコンに辿り着く。ここからのハニコト・エステートの眺望は素晴らしい。ブリストル海峡の前方にはウェールズのカーディフとスウォンジィがかすかに見える。ハニコト・エステートは東のほうに海岸の保養地で有名なメインヘッドの町、そして西のほうにはこれまた海を控えた保養地で有名なポーロック村に挟まれている。この大地こそ見渡す限り広大なカントリーサイドだ（写真2）。ここは北サマセットのエクスムア国立公園にあるハニコト・エステートだ。眼下には5つの村が点在し、前方にはダンケリィ・



写真2 セルワーシの森から見るハニコト・エステートの一部

ヒルが速くに聳えている。オープン・カントリーサイドの自然風景を堪能しながら歩道を下っていく。しばらくするとA39号線に出る。道一つ隔てたところにハニコト・エステート・オフィスがある。

2003年8月、この事務所でナイジェル・ヘスター氏に会った。この時、私へ手渡されたのがSOWAP (Soil and Surface Water Protection Using Conservation Tillage in Northern and Central Europe) なるパンフレットだ。これこそはEU諸国において、政府主導で持続可能な農業を実現しようという極めて画期的な実験である。このプロジェクトは、従来の北欧および中欧での集約農法を止めて、土壌と水質を保全しつつ、採算可能で持続可能な耕作農業を実現しようというものだ。しかもこのプロジェクトにナショナル・トラストが理想的なパートナーとして加わっていることが記されている。このトラストの農場こそ、ハニコト・エステートの農場であって、今では所期の目的を遂げて、将来に向けて持続可能な農業のモデルを提供しつつある。それから第1章の末尾に記したように、クラウトシャム農場が2005年2月からトラストとの間に有機農法を営むための契約に入り、現在に至っている。

このように見てくると、ハニコト・エステート自体が持続可能な地域社会を作りつつあるのだと考えることができる。前記のとおり、クラウトシャム農場はトラストとの間に有機農業を営むための契約に入り、現在に至っている。クラウトシャムは2008年、私たちががこの事務所に勧められて参加したこうもりの観察会のあったホーナー・ウッドを登ったところにある。この辺りはホーナー・ウッドやダンケリィ・ヒルを含めて特別研究対象地域（SSSIs）として国立自然保存地（NNR）となっている。それと同時にここは条件不利地域（less favourable area）に指定された山岳地帯にある92haの畜産業を営む農場である。

早速この農場を訪ね、素描を試みたいのだが、その前にトラストが発行した“The National Trust: Whole Farm Plan – Cloutsham Farm-Holnicote Estate”（The National Trust, 2005

年1月)と“Holnicote Estate—Management Plan 2008-11”にしたがって、トラストが描くハニコト・エステートの姿をごく簡単に紹介しておく。それを基礎にクラウドシャム農場を訪ね、フィールド・ワークにしたがってクラウドシャム農場の持つ社会経済的意義を考えるのがより有効だと考える。

すでに試みたハニコト・エステートの素描から、この大地が持つ生物多様性と自然風景の美しさから見ても、ここがハニコト・エステートの広大な大地の一つであり、極めて重要な色々な要素を含む地域であることはすぐにわかる。セルワージー・ビーコンに立つとブリストル海峡の向こう側に南ウェールズの山並みが見え、手前のハニコトの海岸線の西方にはポーロック湾がある。振り返ればハニコトが一望に開ける。ヒースや低木の広がる歩道を下りていくと、やがてセルワージーの森だ。右に折れてアラファドやボシントンの森を歩いて行くと、ポーロック湾が見える。南のほうにはホナーの森も目に入るし、ラクームの集落地もすぐそこだ。ハニコトには上記のように5つの村があり、そこには何世代もの間、同じ家族の人々が暮らし、強い地域の絆が保たれている。ハニコトのような村落社会では、隣人同士の絆が強いことを私自身、北ウェールズの山岳地帯でも知ることができた。ハニコトの歴史も古い。考古学上の遺跡も豊かだし、ヒースに覆われた荒野と森林地、それに豊かな多様性に満ちた野生生物。5,050.2 haのこの広大なハニコト・エステートには、100マイル以上もの歩道と乗馬用の道路が設けられている。すべての人々に「時間がゆっくりと流れている」この大地を存分に楽しむチャンスが与えられているのである。今では毎年50万人以上の人々が訪れている。

農業不安がいつまでも続く中、ここを生活の場として、農業をいつまでも続けてきた村民たちの心情を思わずにはいられない。それにもかかわらず農業部門が1873年に農業大不況を発生させて以来、今日に至っても回復を示してくれそうもない。今やグローバリズム下、資本主義経済が腐朽の段階あるいは没落の過程を経つつあるのだと判

断してもおかしくないであろう。したがって今こそ、良質なツーリズムが興るべき段階だ。イギリス政府も自然環境保護こそ農業環境政策に通じるのだと言っている。それではナショナル・トラストはクラウドシャム農場を農業と自然環境とを一体化しつつ、自らの自然保護活動をいかに展開しようとしているのか。

### 第3章 クラウドシャム農場を訪ねて

クラウドシャム農場は、家畜小屋と諸設備が不十分だとはいえ、牛と羊を未成育の段階で市場に出す畜産を主とする農場だ。これらの家畜の売値は飼育費よりも安い。だからこの事情は10年以上も前のトラストからの私への手紙の内容とほぼ同じと考えてよい。「補助金を提供する政府の農業環境政策は、トラストにとって極めて有益です。もしそれがなければ、トラストがその資金を借地農に提供しなければならないからです。…」<sup>(8)</sup>。かくして農場内にある建物を利用してホリデー・コテージとB&Bを提供しているクラウドシャム農場にとって、ツーリズムは大切なビジネスだ。場所的にもハニコト・エステートでは最も望ましい位置にある。そういう点から言っても、ツーリズムのための諸設備を整備する必要がある。

ここでトラストの21世紀への農業活動の方針を示せば次のとおりだ。詳細はトラストの刊行物に譲らねばならないが、農業を、地域を守り育てるための枢軸として見ていることは周知のとおり



写真3 クラウドシャム農場の家屋

だ。農業こそが、安全・安心な食料を生産し、提供するとともに、トラストの美しい風景を維持し、豊かで多様性のある野生生物を育て、歴史的遺産を守り、そして可能な限り国民に農業の価値を理解させるためにトラストの牧場や放牧地、そして耕作地などへのアクセスを許し、それを奨励する。トラストは土、大気および水を守るとともに、自然の動きに逆らわず、それと共生すべきだ。経済的には、農村地帯で仕事と収入を生み出し、農村社会を活発にすべきだ。

再びクラウドシャム農場へ戻ろう。実は私がこの農場を知ったのはつい最近のことだ。1994年8月、晴天下あセルワースィ・ビーコンに立った時、いつかこの足でダンケリィ・ビーコンに立ち、そしてダンケリィ・ヒルを歩いてみたいと考えた。ついにチャンスが来た。2007年9月1日、ポロックのB&Bに止宿した私たち夫婦は翌朝、ここを徒歩で出発。A39を走る車をよけながら、ようやく右に折れてホーナーに着くが、ここにあるカフェのサービスは早朝のためにまだ行われていない。そのまま翌年こうもりの観察会（写真4）に参加したホーナー・ウッドへ入っていく。クラウドシャムに源流をもつホーナー・ウォーターが流れ、時には小さな石橋を渡って奥地へと森の道を登っていく。ようやくダンケリィ・ヒルへ。ヒースに覆われた荒野をブリストル海峡のほうを時々見ながら登っていく。ダンケリィ・ビーコンを手前に休止。ここでランチを食べながら、ハニ

コト・エステートの素晴らしい自然風景に圧倒される。西のほうへ目を向けると、遠くに農場の家屋が見える。それに教会の尖塔も見える。こんな遠隔地に、しかも高い所に人が住み、自然に働きかけ自然とともに生活している。こここそ我が国で言う条件不利地域だ。我が国なら、とくに耕作放棄地になっているはずだ。

それではこのクラウドシャム農場は、ハニコト・エステートの一面にありながら、どのような農業経営を推し進めていこうとしているのか。私自身、この時はこのことを考えつつもダンケリィ・ビーコンに立つことも、クラウドシャム農場を訪ねることもせずに、次の機会を待つことにした。

その機会は2009年7月2日に来た。クラウドシャム農場を訪ねることも、ハニコト・エステート・オフィスのナイジェル・ヘスター氏（写真5）とのインタビューの約束も事務所のほうで前もって整えていてくれるから、旨いくはずだ。ところが農場の借地農のカシィ・スティーヴンズ女史が母親の病気見舞いに行ったために私との会見は不可能とのこと。ただし彼女のパートナーのデヴィッド・グリーンウッド氏は在宅とのこと。私たちはさっそく事務所の車で農場を訪ねることにした。グリーンウッド氏とスティーヴンズ女史との意見はほぼ同じであること、同時に両者のトラストとのパートナーシップも順調に進んでいることも明快に話してくれた。だから以下の叙述は私のフィールド・ワークを含めてトラストの見解



写真4 こうもりの観察会のための事前説明



写真5 トラストのカントリーサイド・マネジャーのヘスター氏へのインタビュー



と借地農との見解が一致しているものと考えて間違いない。

この農場も見たとおり極めて古いが、最初の記録は13世紀前半に遡り、見られるもっとも古い建物は17世紀に続いて18、19世紀と建て増しされ現在に至っている。建物の雰囲気自体は当時とほとんど変わらず、今ではこの農場は先にも記したように、ホリデー・コテージとB&Bを兼ねながら、家畜の粗放経営に従事している。クラウトシャム自体は、ホーナー・ウッドとダンケリィ・ヒルの間にあり、広葉樹林、放牧地、溪流、ヒースの荒野を含む多様性に富んだ生息地である。それ故にこの地区に関連した貴重な希少種の動植物を保全するために、注意深い家畜の放牧と自然に富んだ牧草地の注意深い粗放的管理が何よりも重要である。このようにハニコト・エステートとその一画を占める海拔308mのクラウトシャム農場が、自然風景と歴史的遺産を保持し、その質を高めてこそ、持続可能な農場として、ここを訪れる人々を再び惹きつけるだけの魅力を持つはずだ。事実、私たちがハニコト・エステート・オフィスを通じて予約を試みたが、宿泊の予約を取るには遅すぎた。

それではクラウトシャム農場にたいするトラストのビジョンと目標はなにか。上記の事情から明らかのように、トラストはこの農場を自然保護とツーリズムを優先的に考えて維持していこうと考えている。そのためにはこの土地に要する自然物と自然力を用い、できるだけ少なくて済む資本と労働力を加える農業、すなわち粗放的な家畜飼育を維持すること、農場内の建物を良好に保ち、そして農場および周囲の自然風景を保つこと、借地農には最適の収入を、トラストには公正な地代が支払われるように、トラストと借地農とが正しいパートナーシップを組むこと、それから土壌と水および特別科学研究対象地域（SSSIs）の保護に関する、これからますます厳しくなる法的規制を守ること。そのほか農場内の家屋や家畜小屋の改良など、トラストの行うべき仕事は残されているが、借地農とトラストとの間には、相互に独立した協力関係を保つことになんの障害もない。

クラウトシャム農場はダンケリィ・ヒルに放牧権を持つ92haの牛と羊を飼育する農場（写真6）であって、同時にホリデー・コテージとB&Bを兼営していることは既述したとおりだ。土地は痩せており、耕作には適していない。それからクラウトシャムの東側に接してイースト・ウォーターが流れており、この川はホーナー・ウッドへ入り、ここでホーナー・ウォーターと合流し、ついにはポーロック湾へと注ぐ。この川は水源地を発し、ポーロック湾へと注ぐのだが、ここはすべてがトラストの大地であることに注目したい。ハニコト・エステートこそトラストの大地の管理・運営のモデルを提供しているのだということを強調したのである。

ハニコト・エステートはもちろん、この一画をなす地区も自然環境や多様性豊かな野生生物ゆえに、とくに重要な大地であることは言うまでもないが、このことはここが各種の国および地方自治体の自然保護のための指定を受けていることにも反映されている。それらのいくつかを例示しておこう。ダンケリィ・ヒルとホーナー・ウッドは国立自然保存地（NNR）として指定され、クラウトシャム農場の大部分を取り囲んでいる。この地区すべてが特別不利地域（Severely Disadvantaged Area, SDA）として、またエクスマ環境保全地域（Exmoor Environmentally Sensitive Area, ESA）の一部として指定されている。この環境保全地域事業は、湖水地方やコッツウォルズ、そしてエクスマなど指定地域を設けて行



写真6 クラウトシャム農場



われるイギリスを含めた EU 諸国の農業環境政策に基づく農業環境保全事業であった。現在はこの事業は停止され、そのかわりに新たな環境保全事業 (the Environmental Stewardship Scheme) に取って代わられている。この新たな環境保全事業は、これまでの環境保全地域事業とカントリーサイド・スチュワードシップ事業 (Countryside Stewardship Scheme, CSS) の成功を基礎に新たに拡充された事業である。したがってイギリスを含めた EU の農業環境政策は、これまでの成功を基礎にさらに拡大されたのだと考えなければならない<sup>(9)</sup>。なおホーナー・ウッド (写真 7) は国立自然保存地であり、また私たちがこうもりの観察会にも参加したところだが、同時にこうもりの希少種を守るために生物多様性アクション・プランを国が行っていることも忘れてはならない。

上記のごとくクラウドシャム農場は自然環境や野生生物の多様性を守り、そして政府の農業環境政策のもとに自らの農業を営んでいるのだ。

最後にこの農場が条件不利地域にあって損失を続けている中で、実現可能だと思われるビジネスをトラストが紹介している。それは有機農産物の販売事業に参加することだ。この農場は未成育牛を市場に出しているが、この未成育牛を、地元で有機農産物を生産し、それを完成品として販売している農場に委託し、連携することによって、このビジネスは十分に成り立つ可能性があると言う。このビジネスを育て、そして製品に付加価値を付けて販売する最初のチャンスはクラウドシャムが



写真 7 ホーナー・ウッド

行っている宿泊サービスにある。そのためにもホリデー・コテージであれ B & B であれ、高品質のサービスと農場の自然環境を提供しなければならない。それからここの宿泊客、ツーリスト、そしてハイカーたちへ茶菓や軽食を提供するサービスも十分に可能であろう。クラウドシャム農場自体、ホリデー・コテージと B & B を積極的に営んでおり、トラスト自体も “Bed and Breakfast 2010” を刊行して宣伝に努めている。これまでにこの農場だけでなく、トラストの借地農が自らの農場の家屋を改良してホリデー・コテージや B & B を提供し、訪問者に便宜を与えている事実を、筆者自身何度も体験している。

資本主義経済下、農業危機が発生して以来、農業不振が基本的に解決されないまま今日に至っている。このような状況下で、ナショナル・トラストと借地農との連携のもとにホリデー・コテージと B & B が会員に、そして国民へ開放されていることは、まさに将来へ目を向けた極めて前向きの姿勢だと考えることができる。

トラストと大地、そして会員、借地農ひいては国民が三位一体となって地域の再生を目指しつつ、日々活動している様をハニコト・エステートとその一画をなすクラウドシャム農場の活動を例に描いてきた。そしてこのナショナル・トラスト運動にたいして、EU 政府およびイギリス政府そして地方自治体が、農業環境政策および各種の補助金や助成金を通じてトラストとパートナーシップを組んでいることも先に簡潔に説明したとおりだ。かくしてトラストが「もしクラウドシャム農場が農業環境保全事業と補助金によって支援されないとすれば、この農場から牛や羊などの姿が見られなくなるだろう」<sup>(10)</sup> という言葉は単なる杞憂とは考えられない。いずれの国であれ、政府・行政と国民が相互に独立し、かつ責任を負いつつパートナーシップを組んでこそ、国土を守ることができるはずだ。イギリスでは、大地そして国土を守るためにナショナル・トラストが純粋な民間団体として 1895 年に創立され、今や 115 年に達したことを、私たちは決して忘れてはならない。

《注》

- (1) 四元忠博「ナショナル・トラストの成立(1895年)」埼玉大学『社会科学論集』第102号, 2001年1月を参照されたい。
- (2) 四元忠博『ナショナル・トラストの軌跡——1895~1945年』(緑風出版, 2003年7月) 68-69ページ。
- (3) 四元忠博「イギリスの貿易政策と産業構造の歪曲化——農業部門との関連において——」埼玉大学『社会科学論集』第68号, 1989年6月。
- (4) *The National Trust Annual Report 2007/08—Our future—join in*, 表紙裏。  
Tadahiro Yotsumoto, 'Visiting the National Trust—Nature Destruction and the National Trust' (unpublished, 2006.3) p. 6.
- (5) Graham Murphy, *Founders of the National Trust* (London, 1987), p. 133, 四元忠博訳『ナショナル・トラストの誕生』(緑風出版, 1992年) 196ページ。
- (6) 前掲書, 17, 85-86, 180ページ。  
四元忠博「第6章 ナショナル・トラストと地域経済の活性化——ナショナル・トラスト(イギリス)の農業活動と将来への展望——」『武蔵野をどう保全するか』(財団, 1999年10月, 67-82ページ)。
- (7) 四元忠博『ナショナル・トラストへの招待』(緑風出版, 2007年12月), 143-146, 171-172ページ。
- (8) この手紙は, 当時のナショナル・トラストの農業部門の Agricultural Adviser のジョン・ヤング氏(現 Committee for South West Regionの委員)からの1998年10月7日付けの私宛ての質問に答えたものである。
- (9) 上記の事情を詳細に知るためには, ナチュラル・イングランドのホームページ(www.naturalengland.org.uk)を参照されたい。
- (10) The National Trust: Whole Farm Plan—Cloutsham Farm Holnicote Estate, p. 23. なお上記のナチュラル・イングランドのホームページによれば, とくに自然風景, 野生生物あるいは歴史的名勝地にすぐれた地域を守り, かつ高めるための農業活動を行う農民を奨励するために, 1987年にEU政府によって導入された環境保全地域事業は2005年に停止され, 現在は環境保全事業に代えられている。このEU政府およびイギリス政府と農民との契約期間は2005年から2014年まで継続され, その間, 生垣を設置したり, 整備したり, また石壁を修理したりする仕事などにたいして, 年1回補助金が支給される。なお現在のところイギリスには環境保全地域が22か所指定され, 全国の農用地約10%を占めている。参考までにナショナル・トラストの場合, 全所有地の80%が農村地帯であり, そのうちの80%が農用地である。なおトラストとクラウトシャム農場との契約書は The National Trust and the Kathy Stevens (tenant) and her partner David Greenwood—Agreement for tenancy of Clautsham Farm at Porlock in the County of Somerset from yearly from 2005.